

金沢大学英文学会 *The Society of English Literature, Kanazawa University*NO. 5 *NewsLetter*

2013.11.01

★金沢大学英文学会は、1953年1月第1回卒業生の予餞会で結成。年1回総会と講演会・研究発表会を開催、学会誌 *KES* は1954年創刊、現在28号を数える。

会員のみなさま、お変わりございませんか。*NewsLetter* 第5号をお届けします。本年度の運営委員会がさる5月18日に開催され、本号は、そこで討議された内容をもとに編集されています。

=====

Host と Guest

中村 芳久

世界最大の辞書 *Oxford English Dictionary* (通称 OED) を引くといろいろなことに気づかされます。今年の授業で数年ぶりに Geoffrey Chaucer (1340? ~1400) の *The Canterbury Tales* を読むことにしました。実際読むのはその *General Prologue* だけですが、それでも中英語のもつ躍動感、豊かな表現力、Chaucer の語りの妙など十分味わうことができます。ご存知の通り、この物語は、さまざまな階層の人々が、ロンドンの陣羽織亭 (the Tabard) に集まって、そこから一緒に巡礼にでかけ、道中一人2つずつお話しをする、その話しをまとめたものという設定です。

Chaucer を読むときは OED を片っ端から引くことになっていますが、*Prologue* 18行目の *hostelrye* (旅籠) という単語を OED で調べますと、*guest* という単語との関連が浮かび上がります。つまり、*hostelry* は、他の *hostel*, *hotel*, *hospital*, *hospice*, *hospitality* と同じよう

に *host* (泊める、もてなす、主人) からの派生語であり、その *host* が *guest* (客人) と同語源だったというわけです。

インド・ヨーロッパ祖語の *ghosti* ゴスティがその語源ですが、意味は「見知らぬ人」です。旅籠やホテルのような宿泊施設などなかった時代ですから、旅をするところか見知らぬ部族の集落に泊めてもらわなければならない。次は、別の見知らぬ旅人を泊めることになるかもしれない。このように見知らぬ者同士が泊めてもらったり、また泊めてやったりする関係にあることを *ghosti* と言ったのでした。泊める側 (主人) と泊まる側 (客人) という役割が明確に区分されていくと、一方を *host*、他方を *guest* と言って区別したというわけです。

ローマ人には宿を求め、宿を提供する賓客権がありましたから、*hospitality* の精神で「おもてなし」をすること、されることは制度化されていたのかもしれませんが。(しかし *hostility* も同語源ですから、ときには *hospitality* の裏に敵意が潜んでいたことも?)

もともと *host* と *guest* には区別がなく、渾然一体としていたのですから、*hospitality* (おもてなし) とは、客人を主人・主人公のような気持ちにさせることとも言えるでしょう。*hospital* ももとは一般の宿のことでしたが、病気の人が主人公となる場所、*hotel* は旅人を主人公とする場所、*hospice* では人生の最後を迎える人たちが主人公だというわけです。

そうすると学校や大学は学生が主人公、学会は会員の皆さんが主人公の場所だということになるのでしょうか。

2013 年度金沢大学英文学会 総会プログラム

日時：2013 年 11 月 30 日（土）

第 1 部 9:30～12:20

第 2 部 13:00～16:25

（受付開始は 12:00）

懇親会 17:30～19:30

会場：近江町交流プラザ 集会室

〒920-0907 金沢市青草町 88

TEL: 076-260-6722



総会第 1 部 研究発表会 (9:30～12:20)

9:30～10:00 大島さやか（修士課程）
「接続詞 before の認知言語学的研究」

10:00～10:30 廣田篤（修士課程）
「No more than 構文の認知言語学的考察」

10:30～11:00 貝森有祐（東京大学・修士課程）
「変化事象と作成事象に関する認知言語学的分析：英語における結果構文と穴あけ構文を中心として」

11:00～11:10 休憩

11:10～11:40 向井理恵（博士課程）
「語りの「間」－cognitive narratology によるアプローチに向けて－」

11:40～12:20 宮本正秀
（S62 年卒、H2 年修了）

「*Ars Moriendi* (The Craft of Dying) から 17 世紀を読む－Thomas Browne の *A Letter to a Friend* を中心として－」

総会第 2 部 (13:00～16:25)

13:00～13:20

開会の辞

総会 1. 会計報告
2. 会の活動報告
3. その他

13:20～13:50 Speech Contest

13:50～14:00 休憩

14:00～14:40 卒業生の発表

「学部・院でなにを学ぶか」

中谷博美・興水飛鳥（H16 年修了）

大瀧浩平（H15 年卒）

14:40～14:50 休憩

14:50～16:10 講演

「ラフカディオ・ハーンと夏目漱石」

大東文化大学教授 里見 繁美

（S54 年卒）

16:10～16:20

Speech Contest 審査報告と表彰式

16:20 閉会の辞



17:30～19:30 懇親会

会場：市の蔵

〒920-0907 金沢市青草町 88

「近江町いちば館」2 階

（tel: 076-224-3371）

会費：4,500 円

《修行時代》

★イギリスでの日々について

宮本 正秀

（S62 年卒、H2 年修了）

金沢大学英文学会の News Letter にイギリスで学んだ日々についての文章（つまりは、この文章のことです）を寄稿させていただくことになり、とても光栄なことと緊張しています。それと同時に、

この文章を読んでくださるかた、とくに海外で勉強したいと考えておられるみなさんに、まずお詫びしなければなりません。なぜならば、僕のイギリス体験談には、後輩のみなさんが直接参考にできるような情報はほとんど含まれていないからです。そのようなわけで、役に立たない文章になるかと思います。ご了承ください。

僕は、1998年の秋から2003年の秋までの5年間、イギリスのヨーク大学 The University of York で学びました。最初の3年間は正式な学生として学内のコレッジに住み、残りの2年間は学外に住みながら勉強を続けました。(イギリス政府の方針で、現在ではこのような形で滞英期間を延長することは非常に困難になったそうです。)

この5年間でもっとも鮮明に記憶しているのは、イギリスに来て第1日目の、ヨーク駅に到着した瞬間のことです。すべての煩わしさから解放されたような、これ以上ないほどの「自由」を感じました。そして、僕の到着を待っていたかのように、駅前のバス乗り場に「大学行き」のバスが入って来て、そのタイミングの良さがこの先の幸運を暗示しているかのようでした。

しかしながら、現実は厳しくて、勉強はなかなかかどりませんでした。言葉の壁は想像を越えて険しいものでしたし、資金も準備も不足していたのです。また、渡英した当時で、僕はすでに35歳になっていました。本当は年齢のことなど気にする必要はなかったのかもしれませんが、学生としてはやはり年をとりすぎていました。かといって、教員でもない。自分の立場が中途半端なように思えて、なんとなく居場所が見つからなかったのです。親友と言えるような、学生の友人は、最後までできませんでした。

ただし、指導してくださった先生がたには本当にお世話になりました。中でも

指導教授を引き受けてくださったグレアム・パリー先生 Professor Graham Parry への感謝の気持ちは、とうてい言い尽くすことができません。途中、トラブルが重なって路頭に迷いかけた時には、先生の自宅の屋根裏 attic に居候として住まわせてもらいました。(スペイン産のリオハ Rioja というワインが、家賃がわりでした。) 屋根裏といっても、ちゃんとした部屋で、快適に過ごすことができました。結局、屋根裏での居候生活は半年以上にもおよびました。

居候の生活は何かと気を使うことも多かったのですが、それ以上に多くを学ぶことができました。リビングやキッチンでも17世紀英文学に関する話題が飛び交うような環境で過ごした数ヶ月間は、夢のような生活でした。「門前の小僧習わぬ教を読む」という故事がありますが、僕が現在17世紀英文学について論じたり、文章を書いたりするさいの、基礎をなしている知識の多くはこの時期に耳学問として身につけたものなのです。

この文章の冒頭で、参考になることは何もないだろうと申しましたが、書きながら筆者自身が、ある教訓にたどり着きました。大切なのは人との出会い。お世話になったパリー先生について綴りながら、そう思いました。

★留学と院生時代

北野 真理恵 (H19年卒)

「困難は人を成長させる」と言うが、まさにその通りだと思う。私は、自分が大学に入学するまで大した困難はなかったと感じることが、物事にさほど真剣に打ち込んでこなかった証拠だということに、大学に入ってから気がついた。

英語が好きで、英語ができるようになりたいと思っていた私は、積極的に外国

人の先生が担当する授業を受講した。その中の一つが私の転機となった。「自分が一番下手」を痛感する授業だった。受講生はわずか十数名で、そのほとんどが留学希望者と経験者だった。教室で飛び交う英語の速さと語彙の多さに、私は圧倒され、自分だけが取り残されているようで惨めだった。自分ができないことが悔しく、歯痒く、私は毎学期その先生の英語を受講し続けた。毎学期同じような顔ぶれで受ける授業が徐々に居心地の良い場になった。また、留学を目指す私にとって、留学情報や体験談を聞くことができる貴重な場ともなった。

大学3年の夏、交換留学生としてイギリスへ渡った。言語学に興味を持っていた私は、「障害をもって生まれた人や、事故で後遺症を負った人の言葉はどのように扱われるのか」というふとした疑問から、イギリスでの1年間は言語聴覚士を養成するコースで学ぶことに決めた。国家資格取得を目指す学科のため、留学生は私一人だった。そこで人生二度目の「自分が一番下手」を経験することとなった。英語力の不足に加え、医学的知識を持たなかったことが大きな壁となった。ワークショップやセミナーに出席しても、自分がほとんどグループに貢献できないこと、仲間に気を遣わせていることが情けなかった。学校帰りに図書館に寄り、本を抱えて帰宅し、ひたすら部屋で文献に目を通すという海外ドラマのような学生生活を送った。学期末には一つの授業に3時間の筆記試験と90分のデータ分析の試験、実技試験が課された。わずか数行の試験問題に対し、解答は冊子だった。データ分析や実技試験は何とか乗り切ったにせよ、ベストを尽くしても筆記試験は現地の学生の半分にも満たない英文しか書くことができなかった。惨めな思いを何度も経験した一年間。それでも途中で投げ出さなかったこと、決して優秀な成績ではないが、一つの単位も落とすこ

となく留学生活を終えられたことは大きな自信となった。

大学で初めて勉学に打ち込むことを知った私は、就職を先延ばしにし、大阪大学大学院へ進学した。この大学院での二年間が三度目の試練であった。今になって思えば私の考え方が甘かっただけだが、入学者の8割が研究者志望と言われる研究科で期待される学生像と研究内容が、当時の私には別次元のように感じられた。曜日も構わず文献探しやレポート、データ収集・分析に明け暮れる生活を送ることになろうとは予想すらしていなかったのだ。そんな私の支えとなったのは、もっと深く考えたいという好奇心と、私が抱いた疑問を価値ある課題だと認めて下さる先生の指導だった。心が折れそうになったことは一度や二度ではないが、大学院で学んだことが、教職に就いた今、確かに活着していると言える。

物事に真剣に向き合うことでしか経験できない困難があると思う。私の教員生活は日々困難の連続だが、今直面している課題が、きっと糧になるはずと信じて止まない。

《 英文科の思い出、近況 》

★大学院で学んだこと

中谷 博美

(H14年卒、H16年修了)

大学院を卒業して10年になります。小学校での外国語の授業が本格的に始まり、(神奈川県では)高校入試の方式も昨年度から変わりました。中学校でも新しい学習指導要領のもとで授業時数が見直され、英語は週に4時間の授業を行っています。「ゆとり」と「総合的な学習の時間」から「学力」と「キャリア教育」へと移行していく中で、ますますコミュニケーションツールとしての英語に注目が

集まっています。

大学院で学んだことは果たして中学校で教育実践を行うことに役に立つのか、と聞かれると直接的にはあまり必要ないようなにも思われます。でも、わたしにとってはどうしても必要な2年間だったと感じています。大学院で学んだ文法がまさに「英語を話す・書く」ための文法だったからです。

研究のテーマは「Tag question の認知的分析」でした。学部生の時には、例文を集めることとその分類をすることで精いっぱいだったので、院生になってから、意味分析と音声の解析をしました。実は、このときの研究を通して初めて言葉は相手に向けて発信しているものだということに気が付きました。Tense・Aspect や Modality の授業で大学2・3年生の時に学んだことが、院生として研究を進めた時にやっと身についてきたのだと感じました。よく数学を学習している時に感じるあの「感覚」です。習った時には連立方程式の意味はまったくわからないけれど、関数の学習が進むにつれてわかってくる、中学生の気持ち、です。1つの「文法事象」を研究したことで、今までぼんやりとベールをかぶっていた「大学で習った文法」がくっきりと形を持ってきました。代名詞や格についても同じように理解できるようになりました。どうしてそんなことに気が付いたかという、英語を書くときに話しているように書けるようになったのです。英語を話している人の頭の中が少しわかった瞬間でした。日本語を書いてから英語にしようと思わなくなったのは、やっとこのころからです。エドワーズ先生が、やっと意味の分かる英語が書けるようになったね（というようなことを傷つかないように優しく）おっしゃってくれ、びっくりと同時にとてもうれしく思いました。1つできるようになると人間努力をするもので、発音もネイティブにほめられるまで練習

しました。大学院での経験がなかったら、きっと教えることはできなかったと思います。同じ経験を生徒がしてくれることを願って日々活動しています。

★社会人になってみて

真茅 夏恵 (H24 年卒)

あつというまに卒業して一年と半年が過ぎました。みなさんお元気ですか？今回は私のアドレス変更のお知らせメールに、中村先生から「原稿をお願いできませんか。是非宜しく」という驚きの返信が届きこの原稿を書くことになりました。中村先生は授業も驚きの連続だったなあと、なんだか学生時代を懐かしく思いながら久しぶりに文章を書いています。

ちょうど最近、仕事をしながら英文で学んでいた英語について考えることがありました。卒業生の方は経験がある方もいらっしゃるのではないのでしょうか、職場で英文出身という英語が得意だと思われ、英訳の仕事がまわってくることがあります。そんな時は辞書を片手になんとか奮闘しているのですが、仕事で使う英語はある程度単語や型がきまっっていて単純作業な面があります。それを考えると、英文で学んでいた英語はおもしろかったんだなあと思うのです。英米文学で触れた英語はもっと多様な表現で、英語学での言語自体の勉強はもっと興味深かったです。ああもっと勉強しておけばよかったと思いますが、こういうのはやはり後になって気がつくものなのでしょうね。

休日は市民オーケストラに参加しており、そこには大学生からおじいちゃんまで幅広い年齢層のメンバーがいます。楽しそうにホルンを吹いているおじさんも、普段はネクタイ締めて会社で忙しく働いているのだと思うと少し不思議でおもしろ

ろいです。中にはもう定年退職されて今度一人でウィーン10日間コンサート三昧の旅に行くと楽しそうに語ってくれた方もいて、そんな話を聞くと、私も老後に海外旅行10日間くらいふらりと行けるように今頑張っておこうと仕事へのやる気が湧いてきます。みんなで演奏をするのももちろん楽しいのですが、仕事も年齢も違うメンバーと話すことで新しいことに興味を持てたり良いリフレッシュになっています。会社だけではなく、いろんな人たちとの交流をこれからも大切にしていきたいと思う今日このごろです。

《 在学生より 》

★修士論文を前に

廣田 篤（修士2年）

修士課程も早1年半が過ぎ、修論のプレッシャーを日増しに強く感じてきている今、不安や焦りに駆られながらも不思議と静かな一静謐、とでもいうべき一生活を送っている。というのは、短期目標が明確なため余計な事を考える余地がないのに加え、その目標の先にはさらに大きな目標が確かにあり、そこに向かってすべての選択が収斂してゆくという、なんとも運命的な予感に満ちているからだ。他の選択も可能なのかもしれないが、僕は進学を考えている。

今年は六月に、国際学会に参加するため、初めて一人で外国へ渡った。カナダに滞在中、最後まで英語が使えないという事実に落胆したが、その分自分の足りない部分が改めて分かった気がした。また自分の知らない世界、知らないからこそ無関心でいられるにすぎない世界がほんとうはいかに豊穡であるかを知り、心が揺れたのを思い出す。勝手に己の限界

を設定し、挑戦しない理由を挙げて満足することで、如何に多くの可能性を失っているのかを痛感した。

自分がいなくても世界は止まらないと思うと少しコワくもなるが、なにか小さくても確実な拠り所というものが欲しいと、震災以後、特にそう思う。それはどのような形であれ、いつかは消えて無くなると思えば、やっぱりなるだけ自分の側に置きたい。そこで自分の＜身体＞というものに、＜身体＞という確実な基礎に、立ち返ることになる。僕たちはもう自分自身の身一つ以外に＜モノ＞や＜関係＞を完全に所有することはできない、ということに気づいてしまったのだ。それも、実感として。加工も拡散（希薄化）もない＜意味＞は＜現場＞で＜創発＞するという意味では、＜現場＞に対するコミットメントの仕方や程度が問われている、と云うこともできる。

人より随分遠回りしてきたが、ようやく自分の進むべき道を歩けていることに日々感謝しながら、最後まで駆け抜けたい。「最後」というゴールがどこか今は分からないとしても、その過程を少しでも楽しめたら、と思う。「くるたのしい」というのは幸せのひとつのカタチなのかもしれない、とも。

★ゲント大学へ着きましたメール

一瀬暁子（人文学類2年）

＞ 中村先生

大学の正式名称は英語表記だと Ghent University、オランダ語表記だと Universiteit Gent です。どちらも正式名称として通じると思います。

＞ ゲントの街は学生が多く暮らしている学生の街という側面と観光客があちこちから訪れる観光都市というふたつの側面を持った街です。中心街には教会をはじ

め中世の壮大な建物が点在し、絵本のような町並みがつづいていて美しいです。

＞夜になるとあちこちで建物がライトアップされ、日が明るいとくとはまた違った町並みを楽しむことができます。

＞一方で私が住んでいる学生寮のすぐ近くにはクラブやバー、ボウリングやピザ屋など学生を主なターゲットとした店舗が点在するストリートがあり週の後半の夜は特に学生でとてもにぎわっています。治安はいい方で、真夜中でもひとりで歩いて寮まで帰ることができます（たくさん学生の学生が夜でも歩いているため）。

＞こちらに着いて、まずしたことは寮のチェックインです。チェックインできる時間が何時から何時までと決まっていますのでその間に到着できるよう気をつけました。留学生や新入生が多く入居する九月などはチェックインできる時間が普段よりも拡張されているなど配慮がされています。

＞また受付の方は英語で説明してくれ、寮の暮らし方（ルールや付属品の使い方など）が説明された冊子も英語で書いてあるのでオランダ語が理解できなくても問題はありませんでした。

＞ただ寮は、環境はいい（1人部屋、トイレとシャワーも部屋についていてキッチンだけが共用）ものの月おおよそ 370 ユーロと安いとは言えないため、自分で部屋を探すのもありだと思います。でもその場合には外国人である自分の力だけというのはとても難しいので現地の友人の助けなどが必要になります。

＞また入国から 8 日以内にгент市内の市役所の留学生課（のようなところ）にネットで書類を作成し提出しないといけません。市役所の情報についてはビザ取得の段階でおのずと情報が得られます。

＞私の場合、間違えて市役所の窓口に直接行ってしまいましたが、窓口のお姉さんが手続きに必要な URL が書かれた紙をくれ、無事に手続きをすることができま

した。

＞大学関係の手続きで最初に行ったのは大学に所属する学生として正式に学生証を作成し登録することです。

＞この学生証があることで、学食を割引価格で利用できたりгент大学の学生としてのサービスが受けられます。

＞また学生証を作成すると同時に学内のネットワークに接続する際のパスワードとгент大学でのメールアドレスが発行されます。（金沢大学でいうアカンサスポータルの ID、ネットワーク ID などと同じ）私は経由した空港で gmail が使えなくなるというハプニングが起きたのでこの時発行されたメールアドレスはかなり多用しています。

＞渡航前に Learning Agreement という名前の履修登録を大学に提出していたのですがこちらに着いた後でもう一度学内のサイト上で履修登録をすることが求められました。この手続きについては留学生向けのオリエンテーションで大学側が説明してくれましたし、留学生アドバイザーの方とても親切に登録を手伝ってくださいました。

＞またこちらについてから、授業の追加や削除など諸々の変更をすることも可能です。またメールします。



《 平成 24 年度卒業論文題目 》

- 林 公太郎 About Dorian in *The Picture of Dorian Gray*
- 田中 悠香 A Study of *Howl's Moving Castle* and Diana Wynne Jones's Fantasy
- 山越 康裕 A Study of the Present Perfect in English
- 河合 翔平 The Past and the Future of South Africa to See *The Disgrace* by J. M. Coetzee
- 川原 千里 A Semantic Network of the Auxiliary Verb *Can*
- 北川 達也 A Study of the Insistence Pattern of *Very*: Compared with Other Intensifiers
- 高井 貴一 An Analysis of the Clowns in *Twelfth Night*
- 戸田 菜穂子 A Study on Indefinite Uses of Personal Pronouns: A Contrastive Approach to Indefinites in English and French
- 中川 美保 An Analysis of the Growth in *The Mill on the Floss*
- 堀 真奈美 The Difference of the Meaning between Reflexive Use and Intransitive Use
- 宮澤 寛子 Narrative Structure in *Wuthering Heights*

《 平成 24 年度修士論文題目 》

- 眞木 啓生 A Cognitive Approach to the Wind-Direction Word Study

松井 葉月 Towards Self-Definition of Women's Work — Alcott's Little Women and Work

向井 理恵 “*Ma*” and Language

《 在学生の状況 》

＜学生数＞

2 年生 19 名（男性 6 名、女性 13 名）

3 年生 5 名（男性 0 名、女性 5 名）

4 年生 19 名（男性 3 名、女性 16 名）

院生

前期課程 5 名（男性 2 名、女性 3 名）

博士課程 7 名（男性 3 名、女性 4 名）

最近の英文への進学者数は、それほど多くなく、年によって波があります。

＜過去 3 年間の長期留学先＞

シェフィールド大学、リバプール ジョンモアズ大学（英国）、ウィリアム アンドメアリー大学、タフツ大学（米国）、仁荷大学校（韓国）、カレル大学（チェコ）、ゲント大学（ベルギー）

最近の留学傾向としては、英語圏の大学だけでなく、英語プログラムを提供している英語圏以外の大学への留学を希望する学生も増えてきました。

＜過去 3 年間の主な就職先＞

石川県教員、富山県教員、福井県教員、石川県庁、金沢市役所、福井市役所、東京都庁、北陸財務局、金沢大学、静岡大学、北國新聞、JTB、富山銀行、新星出版など

最近は公務員志望の学生が多いです。今年の就職状況は、ここ数年の状況と比べてかなり良いようです。

<院生の研究テーマ>

M1 宮澤寛子

オースティンを中心とするイギリス小説
村澤佑介
イギリスロマン派の詩

M2 大島さやか

接続詞“before”、文法化
廣田篤
“no more than”、構文ネットワーク
西門綾子
英語教育、イントネーション

D1 高島彬

アスペクト、「～ている」、存在様態
向井理恵
narratology、間、illusion

D2 小林隆

談話標識、“I mean”、語用論

D3 田中瑞枝

移動表現、場、格
中條純子
国際語としての英語教育、第二言語習得
市川泰弘
語彙の意味拡張、動詞句の内部構造、言語習得と外国語学習
川島嘉美
所有表現、他動性、動詞アスペクト

・日本認知言語学会第 14 回全国大会

(9 月 21-22 日：京都外国語大学)

小林 隆 「談話標識 I mean の使用原理についての認知言語学的考察」.
田中 瑞枝 「格助詞「に」の多義性に関する認知的考察—通時的考察を基盤に—」

・日本英文学会中部支部第 65 回大会

(10 月 5-6 日：相山女学園大学)

小林 隆 「談話標識 I mean における認知語用論のプロセス」
田中 瑞枝 「移動事象の把握と移動表現上の経路の明示について—認知的アプローチによる一考察—」

《 2012 年度会計報告 》

以下の会計報告は、11 月の総会に諮られます。

2012 年度金沢大学英文学会会計報告

(2012 年 4 月 1 日～2013 年 3 月 31 日)

会計 正木恵美
会計監査 西多喜代子

収入	2,563,626 円
(内 前年繰越金	1,969,736 円)
支出	476,382 円

2013 年度への繰越	2,087,244 円
-------------	-------------

<今年度の学会における研究発表>

・ The 12th International Cognitive Linguistics Conference

(June 23-28: Alberta, Canada)

Kawabata, Yoshimi (川島嘉美)

“(In)transitivity of a Possessive Verb in Japanese”

・ The 13th International Pragmatics Conference (Sep. 8-13 : Delhi, India)

Tanaka, Mizue (田中瑞枝)

“A Study of Japanese Dative ‘-ni’: From Cognitive and Pragmatic Approach”

【収入内訳】 (円)

2011 年度 KES 会費 (振込分) 2,000

2012 年度 KES 会費

(在学生分、総会時支払分、振込分)

248,000

維持費 261,000

懇親会費 82,500

利子 390

小計	593,890
----	---------

2011 年度繰越	1,969,736
-----------	-----------

合計	2,563,626
----	-----------

【支出内訳】	(円)
事務経費	2,754
2011 年度総会施設利用料 (県立音楽堂)	31,220
KES ホームページ制作料	199,920
ニューズレター発送関連	88,071
2012 年度総会施設利用料 (金沢歌劇座)	20,470
2012 年度総会用お茶代	8,947
懇親会費 (Fusion 21)	125,000
合計	476,382

《 事務局より 》

1. 会費の納入について

同封の振込用紙にて、2013 年度会費 2,000 円の納入をお願い致します。ぜひ、会費と共に維持費（一口 2,000 円）もよろしくお願い致します。（すでにお振込み頂きました方には、振込用紙を同封しておりませんが、行き違いがありましたら、ご容赦下さい。）

また、山田先生のご退官記念パーティの様子を収めた DVD（横川善正先生ご提供）をご希望の方は、維持費を 3 口以上お納め頂けますようお願い致します。

当学会の運営状況をご理解の上、何卒ご協力のほどお願い申し上げます。

○会費・維持費等の振込先：
ゆうちょ銀行
口座記号：00720-6
口座番号：16171
加入者名：金沢大学英文学会

2. 総会、懇親会の出欠について

同封のハガキ、または E メールにて、総会及び懇親会の出欠を 11 月 27 日（水）までに事務局までお知らせ下さい。その際には、ご氏名（旧姓）、卒業（修了）年、ご住所、（もしあれば）メールアドレスを

ご記入願います。また、ご近況もぜひお書き添え下さい。頂いたお葉書（メール）は、大事に保管し、総会時に閲覧できるよう受付に置いておきます。どうぞよろしくお願い致します。

（平成元年以降の卒業生の皆様に対しては、メールでのご連絡が主となっておりますので、経費削減のため、今年から出欠ハガキの同封を取りやめております。ご理解の程お願い致します。）

3. KES28 号、29 号について

KES28 号（山田梁先生追悼号及び KES 創刊 60 周年記念号）は、総ページ数 300 ページを超え、とても内容の充実したものとなり、過去 3 年間に一度でも会費を納入してくださった会員の皆様には既にお送りしております。

KES28 号をご希望の方で、これまで会費が未納の方は、事務局までご連絡の上、今年度分の会費と合わせて、維持費あるいは前年度分の会費の納入をお願いします。

次号 KES29 号に関しましては、運営委員会にて 2014 年度末の発刊に向け、準備を進めることが決まっております。つきましては、ご投稿を希望される方は、2014 年 3 月 31 日までに事務局まで、その旨ご連絡下さい。原稿締切は、2014 年 11 月 30 日です。

◆総会プログラム・ニューズレター発送にあたり、住所（転居先）不明の方が増えてきております。住所変更等ありましたら、お手数ですが、事務局までご連絡下さい。



◆金沢大学英文学会役員

会長	中村芳久
副会長	谷内輝雄
事務局	堀田優子
会計	正木恵美
監査	西多喜代子
将来計画委員	高田茂樹、和泉邦子他
KES 編集委員	堀田優子他
広報委員	柳川三千代
運営委員	柿崎謙一、市川泰弘、田辺愛
院生委員	川畠嘉美、中條純子、田中瑞枝、小林隆、西門綾子、向井理恵、高島彬、大島さやか、廣田篤、宮澤寛子、村澤佑介

《 編集後記 》

皆さま、こんにちは。早いもので NewsLetter も第5号になりました。

毎年、卒業生の方の近況や学生生活などの報告、楽しみにしております。

NewsLetter につきましては、金沢大学英語学英米文学研究室 Web サイトにも、過去の分も含めて載せてございます。ダウンロードもできますので、ぜひご利用くださいませ。

<http://english.w3.kanazawa-u.ac.jp/>

また、Web サイトに載せたいものや要望などございましたら、遠慮なくご連絡くださいませ。

私は、年に一度、総会の時に先生方、同級生、先輩後輩の方々にお会いするだけなのですが、今年も元気で参加させていただけることに感謝です。

(柳川)

金沢大学英文学会ニューズレター No. 5

2013 年 11 月 1 日発行

〒920-1192 金沢市角間町

金沢大学人文学類 英語学英米文学研究室

金沢大学英文学会

代表者 中村 芳久

E-mail : kesoffice.kanazawa@gmail.com

URL : <http://english.w3.kanazawa-u.ac.jp/>